

か、彼は之等に就いて省悟するところありと雖も但た依然として「茫として入るところなし」であつた。この時期の陽明は既に苦悶の中にありて漸次その進むべき道が發現しつゝあつたのであるが、但た尙ほ確實に思想の歸宿するところを探ることが出来ずにゐた。

此の種思想苦悶の素因を語れば、陽明自身は決して明白ならぬのではなかつた。たゞ當時にありては實にこの種苦悶を解除するに足る法がなかつたのである。我等は彼の著作たる「朱子晚年定論」の中よりこの癡結ありしこと見出だすことが出来るのである。

「守仁早歲舉業、溺志詞章之習、既乃稍知從事正學、

蘇曼殊に關して

馮 亞 健

（承前、彼の「嶺海幽光錄」「悲慘世界」等の作はすべて、彼の民族的、政治社會的革命思想を十分に暴露したもので決して一個縉衣の徒の作品ではない。彼の詩文畫方面もまた大稱し特稱するに足るものである。然り而して私がその中で最も文化的に功あるものと認めるのは梵文、梵學方面である。とは言へ筆者は梵文を知らないのみならず彼の梵文典等の書は見てゐない、然し彼の漢文を以てせる「敬告十方佛弟子啟」また「告宰官白衣啟」の一文は、洋々灑々、博引旁徵、的確に名教の作であ

而苦衆說之紛擾疲癆、茫無所入、因求諸老釋、欣然有得于心、以爲聖人之學在此矣、然於孔子之教、間相出入、而措之日用、往往缺漏無歸、依違往返、且信且疑。」

我等は右に述べるところ慎重に細味すれば即ち陽明の當時に於ける思想的苦悶の程度を想像することが出来る。惟ふに毅力と智慧を具ふる陽明が決して長くこの苦悶中に於て生活を過すものでないことがわかる、更に偉大なる前途を放棄するものでもないのである。これに因つて陽明の光明發創は便ち一條の新なる坦道を展開せんとしてゐたのである。（以下次號）

る。この佛光式微の今日に於て、曼殊大師以外恐らくはこれだけの學識あるものは得易からぬものと思はれる。假に若し我等をして佛教的立場より言はしむるもまた彼は偉大なる人物であつたかも知れない。ゆゑに曼殊は更に一個の大宗敎家或は大哲學家でなければならぬのである。

曼殊大師は短い生涯であつた。然し今日に到るまで、また多くの人達が忘れることの出来ない人物である、これは彼が如何に人に入ることの深さを語るものである。

餘り久しからざる以前、我等は汪主席が會て日本詩人草野心平氏に曼殊の日本思想界に於けるもの如何と詢ねたことを記憶してゐる。草野心平氏は「たゞ一部分の人に注意されてゐるだけで、多くの人はこれを知らない」と言つた風に答へたのであつた。これは當然で、彼は完全に一個の中國僧侶となつてゐるが故である。但しこれは決して忘れ去られたといふわけではない、村上知行先生は會て「日本人の棄てた日本人——蘇曼殊」一書と「蘇曼殊と私」の短文一篇を書いてゐる。また飯塚朗は彼の作品を翻譯してゐる、かの短文は鳳介君によつて翻譯され「國藝」第三卷第二期上に發表された。いま私はその一部大意を節録して日本人の蘇曼殊に對する認識の一斑を見ることにしよう。

「……彼は日本人である。彼の母は連れ子して中國の蘇某に嫁いだ。中國に於て成長したので中國人となつた大師の二字は已に彼が僧となつたことを表明するものであるが決して日本の僧ではなく中國の僧であると同時に彼は風變りな革命家であり、詩人であり、文學家であり小説家であり、翻譯家であつた。日清、日露の兩役後極端に動搖せる中國の新聞壇上に於て、その瑰奇の才を發揮し警世の曉鐘となつた。彼は且つ畫家となり、而して英語、梵語、日本語に精通しその言語學者たりしてことも亦た疑ひなきところである。たゞ彼は常に胸中の苦を語るべき人がなかつた。彼はその自身の過去を秘して語らなかつたが、しかも言語の外に重壓の懊惱があり、その靈魂の悲慟は直ちにこの三十五年の短い生涯を包んだ。

數奇もこれに至つて極まれりといふべきである」

日本人中又曼殊に注意するその中で殉情最も篤き人に漢文學者飯塚朗君がある。同君は會て曼殊の傑作「斷鴻零雁記」を譯して、改造文庫に入れた。またその後も研究を續けてゐる人があり……私の心靈上につひに曼殊の靈魂があつて鼓動してゐるやうだ……まるで私の心臓を破裂せしめるやうだ、又私を氣狂ひにしうだ、私は彼に對して如何なる言葉を以ていふ可きであらうか、私は適當の言葉を知らない、たゞ多情多恨といふの外ないのである」

中國現代戲作家田漢氏は會て曼殊とウキルライを比較して兩者は絶代のあつた人であり又共に天涯淪落の人である、共に尋常の死に方で去つた。……ウキルライの詩の中には、閨房の餘香や參禪等の句があり、曼殊にもまた之等の句が更に多い……たゞ曼殊はウキルライに比して最もよく我等の心弦をうつものがあつた。彼は日本中禪寺月下の湖景中において一葉の舟に掉し、バイロンの「ギリシャを哀しむ」の章を高吟し、吟じては泣き、泣いては吟じた彼の一事、……曼殊は最もバイロンに傾倒し、且つ彼の詩を漢譯したものも少くない、……バイロンと希臘の關係は極めて大である。バイロンは戀愛に迷つてから一變して希臘の獨立戰爭に參加したのであつた。病んで瘴雨蠻煙の地に死んだのであるが、彼の死に當り希臘軍は會て彼の年齢の數字によつて禮砲若干發を發射して以て哀悼を示したのであつた。これを以てもバイロンが希臘に如何なる影響を與へたかを知ることが出來

る。「日本人に棄てられた曼殊は中國を以て故國と爲さざるを得なかつた。これは正に希臘に於けるバイロンと完全に相同じきものである。(按するにバイロンは英國人にして希臘に行つたのである)この一事はもし當時の中國の革命志士等が明瞭に話をすれば、日本との國際上に、まさに更に有益なるものがあつた筈である。惜むらくはこの種の記録のないことである。要するに彼は胸中常に萬斛の愁思を抱いてゐたのである。而して中國を視るに彼は決して未だバイロンと同様に希臘獨立戰爭に參加することは出来なかつた。彼は僧侶であつた、彼の片手にはバイロンの詩集が捧げられ、片手に珠數が掛けられてゐたのである。」

「彼が政治と社會問題に對する態度はたゞに想像のみでなく、その行動についても亦や彼の思想的傾向を見出だすことが出来るのである。彼が最も關心したものは中國であつたばかりでなく、一個の殉情的愛國者でありまた一個の革命家であつた。彼に一首の詩があるがそれは「日暮佳人あり。ひとり瀟湘浦に立つ。疎柳つくるとこる烟をふくむ。憐むに似たり亡國の苦を」といふのである。私は彼のこの詩に對し彼の一切の複雑、冷酷、精神病者の爆發を見るのである。この爆發的力量は眞にまた奇怪である、まことに私をしてその如何に論なく彼を忘れることを得ざらしむるものがあるのである。又「春雨樓頭八尺の簾。いづれのとときか歸つて浙江の潮を看む。芒鞋破鉢人の識るなし。踏過す櫻花第幾橋」曼殊の詩中最も佳にして最も雅なるものである。即ち彼は日本にお

いてこの詩を作つたのであるが、彼の美麗にして雅緻なる眞に情をつくり傾倒するに値するものである。ある人は次の如く言つてゐる「この寥々たる二十八字の中に、已に彼の人生を把つて完全に書き出だしてゐる、即ち望遠鏡と同様で、これはすなはち望遠鏡の片映である。その物小と雖もすでに無限の江山を全く其中に映し入れてゐるのである。これは是れ何等の筆力ぞや」と、私も亦たこの評論に同情する。畢竟曼殊はこれ多情多恨の人、私をして終身忘れ能はざらしむるのゆゑんはこゝにあるのである。」

以上を見るにいはゆる「日本人に棄てられた日本人」かることを知るのであるが、これは決して日本人に遺棄されたのでなく、また中國に於ても同様で、今日に至るも尚ほ多くの人達が疑念を有つてゐるのである。ゆゑに蘇曼殊は不幸にして短命にして死んだものではあつたが、しかし「精神不死」の四字をとり來つて彼に轉贈するところ出来るのである。而して彼も亦た之れを受くるに愧づるところない筈である。

三

曼殊大師の身世に關しては、その作品及び思想上について既に述べたところである、こゝに更に彼の個性方面に就いて語ることにしよう。

我等は知るのである、一個人の個性がどんなに彼の身世に環境の影響が大なるものであるかを。曼殊は彼の天

賦の異常なる聰穎と彼の特殊の遭遇とが、自然 彼の個性を非凡ならしめたのである。

曼殊の多情多恨は村上知行が言へる如くまことに然うである。彼の燕子龕詩中の「調筆人」に關する幾首かは眞に幽艶入骨、抒情詩中の傑作である。彼の女弟子傾城女史が彼の畫に題した句があるが云はく「佛心も多情俗情を辭して轉擾」と、これは彼の身世的關係によるものであらう。私は或る人が彼はすでに俗をのがれ、參禪したのであるから、當然再び「情」のあるべき筈がないと言つたといふことを聴いたが、これはすなはち俗人の幼稚な論である。あるひは俗僧に對して法を看る、……佛の佛たるは乃ち至高無上至大無麗の眞情である、然らざれば則ち即ちに佛とはならぬのである、曼殊大師はその不運と末世に遇へるためにその至情を厲發し、佛家の慈悲を念となし、儒家の「物與民胞」と相乳合し而して彼の天地の情にうすき本性に成功したのである、どうして彼が情を用ゐることが出来ないといへるたらうか。

曼殊の一生は世界の果てまでその安息するところはないかつたのである。人生の最大幸福は家庭生活であるが、彼にはその體驗はなかつた。彼の人生一切の樂事は天帝に褫奪されたものだといふことが出来る、たゞ食ふことの一事は、彼の人生中最大の恩恵であつた、食ふことだけは彼を制限するところなく完全なる自地があつた。ゆゑに彼は一生喰ふことに對して孜孜たるものがあつたが、遂にこれに因つて病んだ。彼は平生最も菓子を愛喫したので自ら糖僧と號したことがあつた。この菓子好き

から澤山の笑話を生んだのである。彼のこの嗜好は彼が根本に於て日本人であつたので先天的傳襲であつたのかも知れない。日本人は一般に菓子好きであると同時にある人はこれは彼が純然たる日本の血統であつたことの一點を證明するに足ることが出来るといふものだと言つてゐる。

我等は彼が友人に寄せた信書の中から、澤山の喰べ物に關する物語りを見出すことが出来る。彼は物を好くたべたばかりでなくまた料理法に就いてもくはしいものであつた。それは食道樂家と言ふも妨げないものである。彼が最も好んだ菓子以外、また八寶飯もその好むもの、一つであつた。彼は日本に於いて病を養ふとき心中上海「小花園」の八寶飯をたべることゝ念じてゐた。彼は食道樂家であると同時に健啖家でもあつた。彼は一度に四五杯を平げた。酥腐乳を以て菓子醬に代へパンにつけてたべるのは彼の發明であつた。彼は平生放浪不羈、金を拵へることが出来なかつたが錢があれば吝みなく之を使ひ果したので彼の財布はいつも空であつた。彼の食慾を満足せしめることの出来ないのは莫大なる恨事であつた。彼はある時口中に嵌めてあつた金の義齒を外して菓子に代へて喰つたことがあつた。甚だしきに至つては物を喰つて金を擲はないといふことも珍らしくなかつた。

彼の書信中 署名の多いこと、數へることの出来ない程であつた。玄瑛、子穀、三郎、曼殊、博經、湜等の名以外に衲元、雪艇、阿難、行行、糖僧、燕影、燕影子、淚香、太倉、郊僕、王昌、宋玉、孝穆、弘、樂弘、瀾、

阿曇、林惠連等の署名があるが之れは彼が思想の活潑なりしことを見る可きである。

この外彼の人となりも頗る願趣に富んだものがある。彼が人に與へた信書中には多く至情を流露したものがあつて、秋水軒、雪鴻軒が意を盡して文字上の美麗を求めたのに似ず其中に彼の風趣ある談諧の詞句を表現したものが甚だ多い。現在隨意にその中から擧出するを妨げない。

曼殊は三大壇戒を具足してゐたから數名の美人から前後愛せられんとしたが終身妻帯しなかつた。然し臨機應變時に常に酒色に耽ることがあつたがそれは亂に及ばずであつた。彼が陳陶怡に與へた書面中に次のやうなものがある「……東京の汽車は馬車に比べて安い、老三、老五、老九齊しく來り、すべて坐して下るを得、獨り蕙姫の一人坐すべきに非ざるなり。……道兄が蕙姫と共に東遊するを望む、老僧自らまさに榻を掃つて以て待つ、老僧紅塵を看破す、決して揩油の理なし……」又「頭をあけて月を望む、尙ほ念ふ海上解語の花を、識らず誰が

家に向つて飛ぶやを?……」又日本に於て鄧孟碩に寄せたる書中には言ふ「西園破梅あり、爛石、十八世紀の木殿、君之を憶念するか、憐むべし余の廣東皮箱はすべて滬上に於て拍き賣り甚だしきはアラビヤの便器もまた紅頭阿三持ち去る。余大食國(アラビヤ)に赴き古跡一觀せんと欲す。君はニューヨークにありて何をなさんとするか、おそらくは痴心魔女の惑はすところとなるのみ。我がいふところは是の如し。皇帝宣統六年十一月二十日、洋皇帝四年一月五日」(按するに即ち民國三年)この類の滑稽は甚だ多い、彼が放蕩形骸、風趣に富める一斑を知るべきである。

曼殊大師は民國七年五月二日に於て示寂した。假に若し今日まで健在してもまが五十八歳に過ぎない、この風雨飄搖の今日に於て、我等はこの薄命の天才家の境遇と天折に對して實に形容し難き哀悼を感ずるものである。然り而して彼の精神は中國と日本に於いて人に忘れられざるところである。(終り)